

橋に生顔

エイコーコンサルタンツ(株) 設計部 係長

梶島 秀一郎さん

九州産業大学で土木を学び、

福岡市内の建設コンサルタントに勤務、橋梁技術者として研鑽を積んでいた2012年、「平成24年7月九州北部豪雨」が発

生。

熊本、福岡、大分などにかけて集中豪雨により、土砂崩れ、道路の寸断、河川の氾濫をもたらした地域も多数、人的被害も発



災害を前に、技術者として…

生した。

こうした地元の状況を目の当たりにし、「土木技術者として何か出来ないかと考えました」。

福岡県が復旧事業のための技術職員を募っていることを知り、勤めていたコンサルを退職し

八女県土整備事務所、決壊した矢部川の支流・笠原川の復旧と、そこで流出した3本の橋の架替えを担当した。

「被災し、生活に不自由している人が目の前にいる。災害復旧は時間との勝負でした」

被害が大規模に、そして広域的なものになると、人手や資材が不足する。災害は平常時の備えが重要だと痛感したそうだ。

「この時は県内で事業中の有

明海沿岸道路に関わっていた業者等が多数、応援に駆け付けてくれたこともあり、なんとか円滑に進めることが出来ました」

3年間、復旧事業に携わったことは技術者としてやりがいを感じると共に、その後の飛躍にもつながったと振り返る。

3本の橋の完成を目前に、2015年、県職員を辞し、再び民間のエイコー・コンサルタンツに入社。

現在は補修・補強が主な業務。「災害復旧のような時間勝負ではありませんが、構造物をいかに長持ちさせ、後世に残すか、創意工夫をもって臨んでいます」。39歳、福津市出身。

(川村淳一)

